

2013年1月28日



戸締め言葉

GNH研究所 代表幹事 平山修一

話をしている話しやすい人と話にくい人って居ませんか？折角こちらが話をしたいことがあっても相手の反応で何も言えなくなってしまうこともあると思います。

タイ人との会話の中で彼らがよく使う言葉に「クーワー」があります。これは「でもね…」と会話を繋げる言葉ですが、基本的に相手の言葉を遮ります。弱弱しくそつこの言葉を言うので始めは気が付かなかったのですが、基本的には自分の意見を通すために使う言葉です。

タイ人はよく観察すると自己主張の強い人が多いと思います。相手との合意を…というよりも自分の意見を通すために、様々な言い回しで否定から入ります。でも考えようによっては短気な人も多いので、相手を怒らせないように自己主張しないとイケない厳しい社会、それがタイのような気がします。

場所は変わって南アジアのとある国。ここは一般的に自己主張がタイよりも強いと思われています。確かに料金交渉ひとつとっても人々は怒鳴りあい、

自分の主張は曲げません。うまく相手の言葉を使って自分の妥協点に導こうとします。

そして一旦妥協すると今までの言い合いはなかったかの如く、笑顔で後腐れなしです。外国人のこちらとしては言い合いの興奮も冷めやらずむかむかしていたりしていますが、相手がケロッとしているので拍子抜けします。ここがタイとは少し違います。

このように会話の中で否定から入り、相手が「何も言えなくなってしまう」言葉の事を江戸しぐさでは「戸締め言葉」といいます。「でも」、「しかし」、「だって」このように言われると会話も一気に覚めますよね。

逆に「ふーん」「それで？」「なぜ？」と相槌を打つように聞かれるとこちらも話しやすくなります。こうした気配りを会話の中にも取り入れましょうというのが江戸商人の教養とされました。

誰もたまには気分よく話をしたいですよね。その為にはちょっとした気配りが会話のリズムを作ります。ぜひ戸締め言葉ではなく、相槌言葉のお試しを。

コラム① 日本の地域とGNH

山下修平

生存競争

日本は国単位で見れば経済上豊かになり生活の質も向上した。これからもハード・ソフト両面の様々な分野でイノベーションを試み環境制約を克服しながら他国との生存競争に挑んでいかなければならない。もちろん協力・共生関係を築ける国もあるだろうが多くの諸外国・民族は競争に勝たないといけないという思考パターンを持っている。

Sympathy

資本主義、市場経済という競争の場面において失われがちなものがある。それはSympathy（同感、共感、思いやり）である。アダム・スミス自身、人間は他者を思いやることができること、および市場経済が社会を良くすることの両方を説いている。しかし現実には様々な制約によってSympathyを欠いてしまうことも多いだろう。

このような条件下で生じる社会的損失（典型例は交通混雑）を解決する方法の一つが公共政策である。公共政策のうち21世紀の日本人がより幸せに生きられる地域のあり方について少し目を向けてみる。

人生環境

都市計画では意図的に一定の空間内の物的配置を割り当てる。その目的はいくつかあるだろうが基本的な性質として特定の人々ではなく住民の大多数にとって経済性・快適性等の観点から望ましい自然・人工空間をデザインするという強い公共性を持っている。

都市計画の考え方をもっとダイナミックに展開させると地域政策になる。対象範囲は限られたエリアではなくときに市区町村を超え仕事（職）、娯楽、芸術、文化、教育、福祉の環境をどのようにどれだけ整えるかに及ぶ。つまりところ人々の人生環境の多くを規定する。

幸せの原体験

今日の多くの日本人が望む生活の質はあらゆる面で高水準となりもはや一個人では実現不可能で、公共政策等による調整がますます必要となっている。市場経済システムの補完に加え、日本人が幸せになる、例えば物的生活環境、仕事などの社会貢献、知的好奇心に対する欲求が満たされる条件の一つとしても地域政策の果たす役割が拡大しているのである。

このことを実感したのが福岡県北九州市で30歳前後を過ごした1998年からの5年間だった。仕事と大学教育こそ他の土地で得ていたものの自然、空間のゆとり、娯楽、美食、芸術、文化、福祉が豊かに調和した

幸せな人生環境だった。選択肢の質的多様性がある環境、と言い換えてもよい。

GNHの優位性

そのような地域をデザインする上で参考となるのが意外にもブータンであると知ったのは2004年のことである。経済上の豊かさを幸せに影響を与える一要素とし他の8要素を並列的に加えてGNH（国民総幸福）という政策目標を打ち出したことは世界にインパクトを与えた。GNHに学ぶべきは複数要素を組み合わせている点である。

自動車に例えると市場経済は量的で直線的な成長へ導いてくれるアクセルの役割を担う。GNHに含まれる他の要素はスピードを制御できるだけの性能を持ったブレーキや最高速度の制限、舵を取るハンドル、動力となる燃料等を表し、自動車は少なくともこれら四つの主成分が揃って初めて「意味」を持ち人々に具体的な生活の潤いを与える。ドライブの楽しさはアクセルの質感、ハンドリング、ブレーキング、決してトンネル内ではない景色の良さなど複数条件の組み合わせとバランスで構成されている。

GNHや地域政策はこの当たり前のことにあらためて気づかせてくれるし、自分の住む土地に根差して過ごす日常の総体こそが幸せの源であることを21世紀の日本人に論している。



山下 修平（やました しゅうへい）

GNH研究所 会員

幸福をキーワードに国際協力機関と大学院で世界の飢餓と日本の地域政策に取り組む。

コラム② ブータンで感じた「受け取る」こと

関健作

ブータンで働くこと、言うまでもなく日本との違いに驚かされた。私は3年間ブータンの小中学校で教員を務めた。その中で多くの違いを経験したが、今回はその中の一つを紹介したい。

ブータンでは医療費、教育費が無料である。子どもから大人までたちは何かあると無料である病院にすぐに頼る。

何かを学ぶワークショップに参加する際は、自分でお金を払うことはなく逆に学びながらお金をもらえる仕組みになっている。私の周りの同僚たちは海外で大学院やドクターコースで学びたいと言う目標をもっているのだが、自分のお金を出して学ぶという意識はない。海外のスポンサーが見つけれられたとき、奨学金制度を得ることができたときに学びに行く。

ブータンは今も昔も多くの援助を海外の国から受けている。そのため、もらうことが当たり前の文化ができてしまっていると言える。公務員は特にそうだった。

ブータンで働き始めたころ、自分たちのお金では学ぼうとしない、いつももらうことを意識している彼らのスタイルに違和感を覚えた。

しかし、ブータンで暮らし彼らとの生活を送るなかで、その習慣は私たち援助する側の責任でもあることにも気がついた。そしてもらい慣れ文化は決して悪いものでないことだと思えるようになった。

それは、国際協力をしたい、貧しい国々の発展に貢献したいと思う組織は世界中にたくさんあるからだ。

普通の日本人的感觉であれば、人の力を借りず自分の足で立つこと、経済的にも自分で稼ぎ自立することが美德とされる。

しかし、ブータンでは持っている人からもらうこと、人に頼ることは当たり前。ブータンの人たちは他国からの援助や贈り物、優しさを素直に受け取ることができる。

与えるほうの立場になったらどうだろうか。もらうことを拒み、遠慮をしている人。人の優しさを快く受け取りそれを使ってくれる人。私であれば後者のほうをサポートしたくなる。

ブータンは外交がうまく、隣国から世界の国々から好かれている。多くの国と友好な関係を気づいている。だから多くの国にブータンに協力したい、援助したいと思わせることができる。

私は援助を快く受け取ることも生き抜く知恵であると感じた。与える人たちは受け取る人の嬉しい姿を見ることが喜びである。快く受け取ることは与えることと同じように素晴らしいことだ。

受け取ることが非常にうまいブータン人の精神を私は尊敬している。



© KENSAKU SEKI

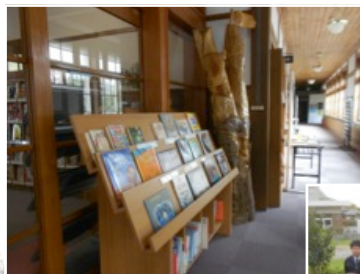
関健作 (せき けんさく)

GNH研究所 会員 / 写真家

順天堂大学卒業後、3年間ブータンの小中学校で体育教師を勤める。現在は写真家として活動。ブータン・チベット・日本を活動拠点とし、講演会・イベントを行いながらブータン人の生き方を多くの人に伝えている。

<http://kensakuseki.com/>

スタディツアーの様子（左下：西明寺庭園／中央：甲良町立図書館／右下：フィールドワークの様子）



スタディツアーin甲良町・北落 レポート

文責 小島有紀子（GNH研究所 研究員）

期間：2012年11月9日（金）～11日（日）

場所：滋賀県甲良町北落地区

参加者：11名

目的：①北落の魅力探索を通じ、GNHが感じられる町づくりのあるべき姿を学ぶ。②外部者として感じた北落の魅力（=子供たちに伝えたい地域の宝物）を地元の方と共有することで、外部者と地元の間での「いいもの」に対する視点の違いを体感する。

11月9日（金）

午前10時にJR河瀬駅に集合。合計11名で、湖東三山（天台宗）西明寺へ向かう。紅葉が大変美しい時期で、綺麗に色づいた庭園を眺めながらの散策は癒し効果抜群だった。本堂に入り、寺宝（釈迦如来立像、十二神将など）の詳細のご説明をいただき、大変勉強になった。

昼食を近くの食堂でいただいた後は、甲良町立図書館へ。ここは、旧甲良東小学校本館として使われていたもので、建設当時日本一と言われたほど豪勢な総檜造りの趣深い建物である。館内には、作法室や裁縫室などがあり、当時の様子を伺い知ることができる。

また、館内の至る所には、町の歴史を感じさせるような展示物が大切に保管されており、旧東小学校として使用されていた当時の歴史を守りながらも、今は町内の幅広い年代の方々が心地よい音楽の流れる空間で本を閲覧できる、図書館としての新しい機能を備えている。短い滞在ではあったが、歴史ある建物の中での優雅な時間を過ごすことができた。

図書館を後にし、宿泊先である渋柿舎 七朗平邸（兼松江商の江商の創始者、野瀬七朗兵衛氏の邸宅）に移動し、各自自己紹介と、平山代表と草郷アドバイザーよりフィールドワークを行うにあたっての心構えについて、ブリーフィングいただく。

その後、甲良町の山田会員と地元北落の方々にご案内いただきながら町歩きをし、歴史的な背景も学ばせていただく。北落では、川のきれいなせせらぎが際立っていて、水を中心に町の生活があることが実感できた。道行く方々も、外部者である我々に対して気さくに声をかけてくださり、心がほっと温かくなる時間を過ごすことができた。

その後、町営浴場で休憩してから宿泊所に戻り、地元の方々との交流会に参加させていただく。交流会では、地元の方々が沢山集まって下さり、朝から出汁をとった美味しい鶏鍋を準備して下さるなど、私たちを温かく歓迎して下さるご配慮に触れ、大変嬉しく感じた。交流会では、町づくりにかける地元の方々の熱い情熱を感じることができ、有意義な時間であった。翌日になるまで宴会は続き、大いに盛り上がった。

11月10日（土）

7時半起床。思いがけなくも、地元の方が私たちの為に温かい朝食を提供して下さった。お味噌汁、有機農産の新米、お漬物が朝の身体に染み渡っていくのがわかる。

続く朝のブリーフィングでは、昨日のフィールドワークを通して得られた気づきを各自発表。その後、『笑顔で暮らせる豊かな農村をめざして』とい

うテーマで、甲良町役場職員として長年町づくりに携わってこられた山田会員によるレポートを発表いただく。

この発表では、甲良町の町づくりに影響を与えた出来事や、町づくりの過程、住民参加型の町づくりが実現している背景を詳細にご説明いただき、より一層の甲良町への理解を深めることができた。

その後、2チームに分かれて「子供たちに伝えたい地域の宝物を探す」という視点をもって、フィールドワークに出かける。視点を絞ることで昨日とは全く違った見方ができることに驚いた。私たちのチームでは、各家庭にお地蔵様が祀られていること、柿が至る所で見られることをポイントとして絞り、その背景について学びを深めた。

ハンバーグ屋さんでの美味しい昼食をはさみ、午後フィールドワーク。夕方、町営浴場に行った後、山田会員より小6合宿（同和問題に関する学習会）にお誘いいただき、特別に見学させていただく事ができた。

この学習会では、地域に古くから根付いている部落差別問題について、地域の小学6年生が学び、話し合うというものであるが、「思いやりをもつこと」「目線を同じにすること」「競争ではなく協力すること」の大切さに気付く機会を得ることのできる、大変素晴らしい取り組みであると感じた。この学習会での学びによって、人の痛みを理解することのできる心優しい人が生まれ、お互いに協力しながら過ごせる環境が実現して行くのだと感じた。

学習会終了後は、美味しい親子丼の夕食をいただき宿舎に戻る。明日の朝に控えた地元の方々への「子供たちに伝えたい地域の宝物」の発表準備をチームごとに行う。模造紙にポストイットや、写真を貼り付けるなどの作業は夜が更けるまで続いた。

11月11日(日)

いよいよ最終日。この日も7時半起床。昨日に続いて、地元の方が朝食をご提供下さり、朝からパワーをいただく。

8時より、近くの安楽寺にて行われる日曜学校を見学させていただく。日曜学校での内容は、皆でお経を唱えた後ご縁さん（浄土真宗ではご住職とは呼ばないとのこと）のお話を聞いたり、道徳的な教を盛り込んだ紙芝居を見るといった内容であった。

子供の頃から日曜学校で学ぶ経験はとても大きいくと感じる。今後の人生で何かあった際には、善悪の

判断基準をもって行動することができるだろうし、地域ぐるみで、地域の将来を担う子供を育成している様子が感じられた。都市部では、世代間の交流が少なくなりつつあるが、甲良町・北落地区でのこのような取り組みは本当に素晴らしいものであると感じる。

日曜学校を見学した後、宿泊所に戻る。いよいよ、外部者から見た「子供たちに伝えたい地域の宝物」について、集まって下さった地元の方々にチームごとに発表を行う。1チーム目は、甲良町・北落の特徴である美しい水の流れを人生に例え、人生の節目ごとに子供たちに伝えたい大切な宝物があることを発表し、もう1チームは、各家庭に大切に祀られているお地蔵様や、たわわに実った小縞柿（この柿は、土壌が適している為、北落で良く育つとのこと）をポイントとして挙げ、歴史を子供たちに伝承していくことの大切さや、柿に関しては活かす方法があるのではないかと発表を行った。

その後、地元の方が考える北落の宝物、私たち外部者が考える北落の宝物ベスト3を発表。地域の方々だからこそ理解している良い点や、外部者の新鮮な視点によって発見できる良い点があり、お互いにとって新たな気づきを得られる大変有意義な時間となったと感じる。その後、昼食をいただき米原駅にて解散となった。

3日間という限られた時間ではあったが、地元の方々との交流、同和問題の学習会への参加、「子供たちに残したい地域の宝物」という視点で行われたフィールドワークなどを通じ、気づかされる点が多く、大きな収穫が得られたスタディツアーとなった。



スタディツアーの様子（右上：交流会の様子／左下：日曜学校の様子）



東京定例会合におけるワールドカフェの様子。

東京定例会合報告 2012年12月15日開催

文責 齊藤光弘（GNH研究所 東京事務局）

●会合概要

- ・日時 2012年12月15日（土） 15:00～18:00
- ・場所 早稲田大学

●内容

- ①山田禎夫さん（本会会員）ご講演
- ②甲良町スタディーツアー（2012年度）報告
- ③ワールドカフェ

①山田禎夫さんご講演

甲良町役場にお勤めしながら、甲良町の町づくりに30年近く関わっていらっしゃる、山田禎夫さんから、甲良町の歴史や地理的な特徴をご説明いただくとともに、町作りの特徴について、ご講演をいただきました。甲良町の町づくりは、(1)「農村集落の潜在的な自治力を新しく回復させた取り組み」であった点、(2)「地域コミュニティの学習プロセスそのもの」であった点、(3)「農村の多面的価値と可能性を問い直す試み」であった点という3つの観点に特徴があるそうです。

中でも、(2)「地域コミュニティの学習プロセスそのもの」という点に関しては、村の集落ごとに設置されている「村づくり委員会」や、地元住民に加え外部の専門家を「せせらぎ夢現塾」についてご説明いただきました。地域住民を巻き込み、村の問題について、いかに「私事」という意識を醸成し、地域として対応していくか、外部の専門家が参加し

やすい仕組み作り、外の知見をいかに取り込んでいくかなど、長年のご経験からのお話は、非常に具体的で、これからの地方農村における町づくりのあり方や方法論について、大変示唆に富むものでした。

②甲良町スタディーツアー（2012年度）報告

山田さんのお話の後、今年で3年目となる甲良町スタディーツアーでの学びを、会員の皆さんと共有しました。本年は、山田さんをはじめ地元の方々と一緒に町歩きをする中で、甲良町北落地区の魅力や町作りの歴史を学びました。「子供たちに伝えたいものは何か?」という視点で、スタディーツアー参加者が作成した資料の中には、誕生～成長～死という人生のプロセスごとに感じられる町の魅力や、民家の敷地内に多く見られる“お地藏様”や、食糧が少なかった時代に植えられた“柿”などを切り口に、発表が行われました。（※詳細は本ニュースレターのp.4-5をご覧ください）

③ワールドカフェ

山田さんのご講演、甲良町スタディーツアーの報告を受け、町を見る際の新たな視点を獲得した上で、「自分の故郷/住む町の魅力」について、会合参加者間で対話をし、理解を深めました。

次回会合は、2013年3～4月に開催予定です（通常、東京定例会合は四半期に一度の開催）。

掲示板

- [セミナー] 「ブータン王国から学ぶこと ～真の幸せとは～」 (参加費無料・要申込)

ブータン王国唯一の国立大学、王立ブータン大学と秋田大学は2012年7月に日本国内の大学では初となる大学間国際学術交流協定を締結しました。本セミナーでは、ブータン王国の歴史や文化、政策や日本との関わりなどについて対談形式で解説し、ブータン王国への理解を深めることで「真の幸せ」とは何かを考えていきます。

日 時：2月8日 (金) 18:30～20:00 (受付18時～)

テーマ：ブータン今昔

講 師：西田文信 (秋田大学国際交流センター准教授)、山本けいこ (「ブータン 雷龍王国への扉」「ブータンの染と織」著者)

場 所：東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター東京 2階 多目的室3 (東京都港区芝浦 3-3-6)

申 込：秋田大学地域創生課

TEL 018-889-2270 / FAX 018-889-3162

E-mail shakoken@jimu.akita-u.ac.jp

- [講座] 「ブータンと日本 ～本当の幸せってなんだろう～」 (要申込)

なぜ、ブータンの人たちは、自分が幸福だと思えるのでしょうか？「GNP (国民総生産)ではなく、GNH (国民総幸福) を測ろう」というブータンの考え方、国づくりの取り組みをお聞きします。そこから見えてくる本当の幸せとは…？

日 時：2月17日 (日) 13:30～16:00

場 所：開港記念会館 2階 9号室

みなとみらい線 日本大通り駅 徒歩1分

参加費：1,000円 (資料・お茶付き)

講 師：草郷孝好 (関西大学教授)

申 込：<http://e-tree.jp/event.html#0217> より

編集後記

- 昨年4月より、四半期ごとに刊行してきたこのニュースレターも、無事1年間発行し続けることができました。とても小さな節目ではありますが、一步一步積み重ねる難しさを感じた1年でもありました。引き続き、よろしくお願い致します。(藤原整)



GNH研究所 ニュースレター 第4号

発行元 GNH研究所 (代表幹事：平山修一)

<http://www.gnh-study.com/>

発行日 2013年1月28日

編集者 高田忠典 (GNH研究所 研究員)、藤原整 (GNH研究所 研究員)

著者 平山修一 (p.1)、山下修平 (p.2)、関健作 (p.3)、小島有紀子 (p.4,5)、斉藤光弘 (p.6)

写真 瀬畑陽介 (p.7)、山下修平 (p.2)、関健作 (p.1,3)、小島有紀子 (p.4,5)、須藤伸 (p.6)

※全ての著作物および写真の著作権は、上記の方々に帰属しています。